

(9) 八東小学校

学 校 長 益永 美佳
校内研究代表者 浦田 奈々

1. 研究主題

自ら学ぶ みんなで学ぶ

～課題に粘り強く取り組み、考えを伝え合うことを通して～

2. 主題設定の理由

本校は、ここ数年、各種学力調査において県平均や全国平均を下回る大変厳しい状況が続いている。特に、算数科において問題場면을イメージできなかつたり、式や答えの意味を説明できなかつたり、問題解決の過程を表現したりする力に弱さが見られた。

そこで、昨年度は、複式の強みである「とも学び」と「ひとり学び」を活かした授業改善に取り組んだ。年度途中に授業スタンダードを改定し、「授業者ととも学び→類似問題でとも学び→適用問題でひとり学び」に取り組んだことによって、徐々にではあるが、算数用語を用い、根拠に基づいた説明を行う児童が増えてきた。また、教師と学んだことを活かしながら児童同士で問題を解決していく協働的な学びもできるようになってきている。

12月に行った各種学力調査の算数では、1・3年生は目標値を上回り、2年生は目標値と同等で、学年相応の学力が身につけていることが分かった。6年生においては「知識・技能」よりも「思考・判断・表現力」の正答率が高くなり、学力に伸びが見られたものの、目標値を上回ることができなかった。4・5年生は、高知県学力定着状況調査において県平均や目標値を大幅に下回る大変厳しい結果となった。しかしながら、6年生と同様に「知識・技能」を測る問題よりも「思考・判断・表現力」を測る問題の正答率が高い傾向にあり、授業改善の成果が表れているものと捉えている。

これらの成果を踏まえ、本年度も研究教科を算数とし、授業スタンダードを基に立式や答えの根拠を説明することに重点を置いた授業を進めていく。併せて、学習内容を同領域で揃えるカリキュラムマネジメントを行い、授業DXによる「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に実現していく「複線型」の授業の研究にも取り組み、複式の良さ（学びの連続性・関連性が見える、主体的で協働的な力が身につく）を生かして、個を鍛え、褒めて伸ばし、知・徳・体のバランスの取れた児童の育成を目指す。

3. 研究の進め方と方法

(1) 研究仮説

次のような手立てや指導の工夫を行うことにより、研究主題を達成することができるであろう。

- ①教材研究において、学習指導要領を基に働かせる見方・考え方を吟味することで「めあて」の質を高めるとともに、児童から見方・考え方を引き出すための「問い」の持たせ方（教師と児童のやり取り）についても具体的に描く。
- ②導入では、問題や既習を基に児童から問いを引き出し、見方・考え方を明示した「めあて」を設定する。
- ③展開では、問題場면을具体物や図、表等を用いて表現させ立式や答えの根拠を説明させる。その際に、 $\text{図}=\text{式}=\text{言葉}$ の関連性が見えるように板書し、児童が図の良さを実感できるようにしていく。
- ④終末では、本時で育てる資質・能力に合った適用問題に取り組みせ、振り返りでは、本時で何が、どのような方法でできるようになったかを書かせることにより、本時で成長した見方・考え方を自覚させる。

(2) 研究方法

- ①児童の発達段階や実態に応じて、1・2年生は「わたり」、3・4年生は「同時指導」、5・6年生は「ずらし」の授業スタイルで取り組む。



- ②全学級が学期に1回、年3回研究授業を行い、短いサイクルで授業改善のPDCAを回すことで学力向上を目指す。

- ③復習中心の放課後学習と予習中心の家庭学習により、基礎学力と自己調整能力の育成を図る。

(3) 研究の歩み (校内研究授業等)

6月11日	1年「のこりはいくつ ちがいはいくつ」 2年「3けたの数」
7月2日	3年「同じ数ずつ分けるときの計算を考えよう」 4年「わり算のしかたを考えよう」
9月26日	「令和の授業を創る」推進プロジェクト 複式授業セミナー 5年「偶数と奇数 倍数と約数」 6年「円の面積」
10月8日	1年「たしざん」 2年「ひっ算の仕方を考えよう」
10月22日	3年「わり算や分数を調べよう」 4年「分数をくわしく調べよう」
11月12日	5年「分数のたし算とひき算」 6年「比例と反比例」
1月16日	1年「おおきいかず」 2年「100より大きい数を調べよう」 3年「分数を使った大きさの表し方を調べよう」 4年「広さのくらべ方と表し方を考えよう」 5年「割合」 6年「算数のしあげ」

4. 今年度の成果 (○) と課題 (●)

- 依然として高学年の学力が厳しいものの、算数においては、昨年度の各種学力調査よりも正答率に伸びが見られる。児童からも手ごたえを感じている声が聞かれる。
- 各種学力調査において知識・技能が向上した。復習に重点をおいた放課後学習、予習に焦点化した家庭学習の成果と考える。
- 授業では、式だけでなく図や説明をかき、根拠を示しながら説明することが定着してきた。
- 「過去の学びとつなぐ」をキーワードにタブレットを使った振り返りに取り組み、導入や終末で教師が前時の板書写真や既習のデジタル教科書等を提示することで、児童は学びを統合的に考察するようになってきた。
- 短いスパンで授業改善のPDCAを回したことにより、日常的に教材研究を行い、教員同士が学び合う姿が見られるようになった。学力向上の大きな原動力となった。
- 各種学力調査において思考力・判断力・表現力に伸びが見られない学年が多い。同時指導の実現が改善のカギと考える。
- 毎時間タブレットは使用しているものの、教師主導の活用となっており、児童が学びを自己調整したり、深めたりするための道具になっていない。授業DXの研究・推進は引き続き研究課題である。

次年度は、クラウドの特徴を生かした学習者主体の授業にしていくために、児童にいかんが学びをゆだねていくか、そのためのカリキュラムマネジメントや教材・授業研究を行い、AIも活用しながら複式学級における複線型の授業の研究を深めていきたい。